



安政4(1857)年、開創。同6年、龍徳町(現・信香町)に仮本堂と金比羅殿が建立。明治2(1869)年に若松町、同7年に新富町(現在地、現・真栄)に移転。現在の建物は、同9年に本堂、同22年に金比羅殿が上棟された。金比羅殿の棟梁は明治期に小樽の主要な建物を次々に建築した加藤忠五郎。龍徳寺境内には加藤家の墓がある。平成6(1994)年、本堂が小樽市指定歴史的建造物に指定。境内の「夫婦イチョウ」は同5年に小樽市の保存樹木1番に指定されている。

金比羅殿 龍徳寺本堂の左側に隣接している



龍徳寺・金比羅殿

りゅうとくじ・こんびらでん



小樽れっけん



北前船の船絵馬がのこる、小樽の海運業者の信仰拠点

龍徳寺は、小樽で最も古い本堂、そして、ひと塊の木材から削り出されたものとしては日本一大きな木魚があるお寺として、小樽市民にも観光客にもよく知られている。安政4(1857)年、当時のヲタルナイ場所にも多数の和入たちが流入しつづけたことに注目した函館・高龍寺の和尚の発願によって開創された。明治初期には榎本武揚軍の屯所になり、彰義隊の隊士たちが起居していたこともある。

最近、小樽商科大学の調査により、龍徳寺の本堂左側に隣接する金比羅殿内に船絵馬が8枚あることがわかった。船絵馬は、江戸時代以降、北前船の船主らが航海の安全を祈願して寄港地の寺社などに奉納した。東北の日本海沿岸や北陸をはじめ道内各地にも多数残っているが、小樽では祝津恵美須神社の2点しか知られていなかった。

船絵馬には船名や奉納者の名前・出身地、奉納年、絵師の名前などが記載されていることがあり、歴史資料として重要であるほか、美術品としての魅力もある。北前船は小樽の発展に大きな役割を果たしたが、船

主たちによって建設された石造倉庫以外、目に見える痕跡は乏しく、船絵馬は貴重な存在と言える。

船絵馬は一般的には神社に奉納されるもので、龍徳寺にあるとは思われていなかった。龍徳寺では、創建当初から龍神を祀る龍宮殿が設置されていたが、明治22(1889)年に金比羅を祀る金比羅殿として再建され、仏と共に鎮守されていることが特徴である。

金比羅は海上交通の守り神として海運業者や漁師などに信仰されるが、龍徳寺では明治24年に「小樽金毘羅保存会」という組織が結成され、藤山要吉や塩田安蔵ら海運関係の名士たちが会員となっている。金比羅殿が小樽の人びとにとって重要な存在であったことがわかる。会員の居住地は小樽にとどまらず、道内各地や本州にまで広がっていて、当時の小樽と各地の交流の深さがうかがえる。

船絵馬には地元小樽のほか、新潟の人が奉納したものも含まれている。龍徳寺・金比羅殿とその内部の船絵馬は、海の都市・小樽のはじまりの記憶をいまに伝えてくれる。



ひと塊の木材から削り出されたものとしては、日本で最大の木魚。昭和8年に市内の産科医が寄進



金比羅殿内の船絵馬

【参考文献】
「龍徳寺開創百五十年誌」(海雲山龍徳寺、2008年)、「龍徳寺で船絵馬発見」(北海道新聞)(小樽・後志版、2016年3月24日付)、「船絵馬 小樽の新名物に」(北海道新聞)(小樽・後志版、2016年4月2日付)
【謝辞】
龍徳寺住職の有田恵宗さん、土屋周二さん、駒木定正さん、小樽市総合博物館のご協力をいただきました。感謝申し上げます。